おれの名前か?　岩窟王ですが、なにか?　（嘘）

慢心王って英雄王?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おれの名前か？　岩窟王ですが、なにか？　（嘘）

【Ｎコード】
Ｎ４３６８Ｚ

【作者名】
慢心王って英雄王？

【あらすじ】
亡国機業に所属する青年――黒岩　竜胆・十八才・男性が、亡国機業宛に送られてきた招待状（挑戦状）を元に訪れた場所は、数多ある篠ノ之束の違法研究所のうちの一つ。そこで、竜胆は、束が開発していた試作品無人ＩＳを粒子変形（ターン・オーバー）を駆使して破壊する。それが原因で、彼は束の興味対象の一人になってしまった。――これが世界で初めてＩＳに乗れる男性とウサミミ研究者との出会いだった。
※ふむ、あらすじはこんなものだろう。感想やアドバイス、誤字脱字の指摘等あればよろしくお願いします。

プロローグ壱（前書き）

ふむ、取り合えず思いついたことを書いてみたのだが、これは面白いだろうか？

プロローグ壱

まともに道が舗装されていない山道の途中で乗ってきたジープから降りたおれは、暗視ゴーグルをつけ、使い慣れた武器――粒子変形（ターン・オーバー）（今は自動式拳銃の形をしている）を片手に暗い森の中を歩き始める。

耳にかけたインカムから聞こえるほかのメンバー（とは言っても一人だけだが）からの通信をしっかりと聞きながら包囲を狭めていく。たった二人で包囲と言っていいのかは、このさい無視してくれ。

おれは協調性がないせいか、おれの動きと合う人間が組織の中で少なかったんだ。

まぁ、おれが後ろに下がって大人しく狙撃とか後方支援に努めていれば言いだけの話なのだが、自分で言うのもあれだが、おれは細かいことが正直苦手だ。だから、狙撃が苦手。

使えないと言うわけではないのだが集中力が如何せん持たない。

スコール曰く、『あなたは天性の前衛（アタッカー）だから仕方が無い』ということらしい。

まぁ、確かに、前衛の方がいいっちゃいい。むしろ望んで前に行かせてください。お願いします。

と、そんな事をしていると、光学迷彩で巧妙に隠してあるけどおれにはみえみえになっている入り口発見。

「お嬢ちゃん、こっちで入り口発見。そっちは配置についたか？」

『とっくについた。それと、そのお嬢ちゃんと言うのはやめろと何度言えば分かる、お前は』

「お嬢ちゃんがおれを一回でも組み伏せられたら、名前で呼んでやるよ」

合い方との短い会話終了。

おれは暗視を解除して、光学迷彩の奥に隠れている扉の前に立ってみる。それにしても、中々にリアルな光学迷彩だ。軍用を使っていると言われても驚かない。と言うか、そう言ってくれたほうが納得。

改めて扉をみてみると、指紋認証と網膜認証と声紋、テンキーと四重のロックがかけてあった。本当、国管理の研究所じゃないのにここまでって厳重だとは恐れ入った。

さすがは『篠ノ之束の開けてビックリ入ってビックリ玉手箱研究所その一九三二号室』だ。本当、ビックリした。ここまでとは。

だがおれには関係ないな。どうせ彼女のことだ。おれ達がここに来ることは数週間前から予知していたに違いない。つまり、おれが忍びながらこの研究室に入る必要性はない。

おれは手に持っている粒子変形（ターン・オーバー）に意識を集中し、領域内に登録・保存している数多の武器の中から一つを選択。

名称――バターナイフ。

右手に持っていた自動式拳銃が内側から破裂するようにして粒子化する。その粒子は即座に再びおれの手元に集まりながら、バターナイフの形を作り上げた。

おれはバターナイフの柄の部分にあるスイッチをＯＮにする。するとすぐ、刃の部分が熱を持ち始め、五秒もすると白い光を発するほどの高温に達した。

おれはそのナイフを扉の隙間にねじ込んで、思い切り刃を振り下ろす。するとすぐに何かに行き当たる。扉が開かないようにする鍵だ。

だが高温のバターナイフは、金属が焼けるきな臭いにおいを発しながら、その鍵をゆっくりと断ってゆく。それはまるで、ナイフでバターを斬るときのようにゆっくりと。

強引なロック解除（？）を終え、おれは扉をゆっくりと開ける。何があるか分かったものではないから慎重にいこうと思う。

少し前の話をしようか？

これはおれこと黒岩（クロイワ）竜胆（リンドウ）が、こんな事をし始める原因となったお話だ。

おれの所属する『亡国機業』と言う組織が所有する全ての端末にある一通のメールが送られてきた。

差出人は言うまでも無く、篠ノ之束。

途中途中で挟んであるわけの分からない自慢話を割愛し、重要な部分だけを掻い摘んで説明すると、
『天才束さんは××の〇〇山にある研究所にいる。この束さんの天才的頭脳が欲しければ勝負だ！』と言う、まぁ、早い話が挑戦状と言うことだ。

この場合おれは、博士のハッキング技術と度胸と、うちの隠蔽工作の杜撰さのどちらに呆れればいいのだろうか。

それで、そのとき出られる人間で選抜メンバーを作った結果、おれとお嬢ちゃん（マドカ）になったわけだ。

戦力は多いに越したことはないのでオータムも連れて来ようと誘ってみたのだが、アラクネを部分展開するほど強く拒否された。ホント、おれ、彼女になにか悪いことしたか？

いや、確かにスコールとしょっちゅう食事に出かけたり、デートと偽っていろんな国飛び回って各国のＩＳ見物してはいるが、オータムに恨まれるようなことはしてないぞ（笑）。

そんなことを読者に説明していると、どこからか機械の駆動音のような音がする。にしても、やけに通路が広いな。これなら大型トラックの一台ぐらい普通に通れそうだ。

と、天井を見上げていると駆動音の正体が現れた。

あえてその形を形容するならば、獣。とは言っても四本足ではない。二本足。イメージとしては背骨と地面が平行になるぐらい超前傾姿勢のカンガルー。

（なんて形容しては見たものの、どう見積もったってカンガルーには見えないが）

メタリックに輝く胴体と四肢、それに尻尾は何やら螺旋状の……ドリルか、あれは？　あんなものを後ろにつけて何のメリットがあるんだ……。

まぁ、その辺はいいだろう。尻尾と体の色を除けばりっぱにカンガルーといえなくもないかもしれない。

だがもっともカンガルーとかけ離れてるところが一つ。それは、アゴの下まで伸びた、剥き出しの二本の牙だ。それ以外の歯もすげぇ尖ってる。あんなのに噛み付かれたらシュレッダーに入れた紙みたいになりそうだ。

おれは即座にバターナイフを、粒子変形（ターン・オーバー）の領域内に登録してある一五種類の武器の中から、形状を自動式拳銃に切り替え、六種類ある弾丸の中から徹甲弾をチョイスし、立て続けに三回引き金を引いた。

自動式拳銃の弾倉内部で生成された徹甲弾は、そのまま薬室へと押し込まれ、おれの命令に応じてメタリックカンガルー（いまおれが命名した）の顔に走るセンサーアイに飛び込む。

徹甲弾はメタカン（長いから略した）の装甲をいとも容易く貫通し、頭部から尾の方へ抜け出た。

弾丸で開けたと言うよりかは錐で開けたように綺麗な風穴があいたメタカンの体が金属音を立てながら横に倒れる。

（意外とあっけないな）

篠ノ之束の研究室にある警備機能だからもっとすごいのが出てくると思った。映画『バイオ〇ザード？』のレーザー室とかそんな感じの。

だがまぁ、そんなものが出てきたら避けきる自信はないので、出来れば出てこないで欲しい。と言うより出てくるな。

それでまた機械の駆動音。こんどはさっきよりも数が多いようで、音の鳴り方が不規則な上に音量も大きい。

さっきのメタカンが出てきた通路よりも二本ほど奥の横道から、人間タイプのロボットが出てきた。スター〇ォーズに出てきそうな歩行ドロイド。と言うか、そのまんま。

（なんだよ、博士って実は発想力の乏しい人なのか？）

ハードやソフトを作るのは得意でも、外見を形作るのは苦手なのだろうか？　いや、自分で自分のことを天才とか言ってる人に限って、そんな間抜けな話しがあるはずがない。

おれは弾をパラベラム弾に切り替えて、次から次へと出てくるドロイドの処理装置が内蔵されているであろう頭部を吹き飛ばしてゆく。あのレーザー銃を持っていないのは幸いだった。

だが、このままだと物量的差で押し切られそうだ。粒子変形（ターン・オーバー）に内包されている弾丸も無尽蔵ではない。一種類二千発前後。すぐにジリ貧に近い状態になることは日を見るより明らかだ。

この調子で撃っていくと前を突破するよりも先に後ろから出てきて詰まれる。

おれは粒子変形（ターン・オーバー）が内包している武器の中から一つを選択する。

名称――ワイヤーカッター。

銃が粒子になり弾け、丁度バトン（陸上競技で使うほう）サイズの棒を形作った。

おれはそれを振りながらスイッチを入れる。棒の中に内包されていたワイヤーが鞭のように弧線を描きながらドロイド郡を通り過ぎる。

スイッチを切りながら、伸びでたワイヤーで自身が捲かれるよりも前にワイヤーを本体から切り離す。切られたワイヤーは音も無く壁にぶつかった。

二の腕の辺りからワイヤーカッターで両断されたドロイドの頭と腕がごとりと転がる。その一機を皮切りに、後ろに並んでいたドロイドの頭と腕も次々と落下し、次いで膝から崩れていく。

おれは金属の塊とかしたドロイドたちを踏みながら通路を進んでゆく。

それにしても、こんな場所に研究所があったとはついぞ知らなかったな。どうりでおれたちがいくら探しても見つからないわけだ。まぁ、相手も見つかりやすい場所に研究所を構えるはずがないが。

おれはコートのポケットから板チョコを取り出し、適当な場所か

ら折って口の中に放る。ふむ、やはりチョコレートは明〇に限る。

考えるにも運動するにも糖分は必須。と言うことでのチョコレート。始めはチュッパチャプスとかもありかな？　とか思ったんだが、戦闘の合間の短い時間であめは舐めきれないので、チョコレートにした。いまではおれの必須アイテムになっている。

（それにしても迷路みたいだな）

よくこんな施設を一人で作り上げたものだ。驚きのあまりついつい見かけた扉の鍵を強引に解除してしまう。

横に滑るタイプの扉だったのだが、どうやらおれが強引にロックを解除したせいで自動ドアでなくなってしまった。仕方なく手動で扉を開ける。

すると出てきたのは等身大のメタリックなウサギだった。今回はカラーリングもしっかりとされていて白に真っ赤なおめめが可愛らしい。

ふむ、どうやら作動していないようだ。これはラッキー。起動する前に壊してしまおう。

おれはバターナイフでメタウサの、ウサギとは思えないほど太い首に刃を入れる。塗料の焼ける嫌な臭いを発しながらガッシャンガッシャン音を立てながら転がる頭。

そのときだった。

そのウサギの後ろで赤い二つの光が点灯した。

そしてガッシャン、ガッシャン鳴らしながら前に出てくる。陰から出てきたのは、おれがいま頭を落としたメタウサと同型のメタウサ二号だ。

どうやら、一号を破壊すると別のが起動する仕掛けだったらしい。

動き始めてしまっては仕方が無い。安全策で粒子変形（ターン・オーバー）をナイフから銃に変え、ウサギの頭部に向けて引き金を引く。

撃った二発のパラベラム弾はウサギの頭部にぶつかると、火花を散らして跳弾。全く別な所に穴を開けた。

（やっぱりパラベラムじゃ貫通しきれないか）

おれがそう思って弾を徹甲弾に変えようとしたときだった。メタウサ二号が大分動物チックな両手（動物チックって何だよ……）を背に回した。

その両手を前に戻したとき、手にはボクシンググローブならぬ、かなり鋭く尖ったキャロットグローブを装備していた。

そして、ウサギの如く跳ねておれとの距離を詰める。

腰の入った右ストレートが、咄嗟に反応して首を傾けたおれの頬を掠めた。

（うおっ？　随分といい拳だな）

ワン・ツー、左フックと続くウサギパンチを銃口下に追加で作り

出したソードで受け流す。

距離を取ろうと後ろに下がる。それをさせまいとこちらに向かってくるメタウサ二号に向けて徹甲弾を二発見舞う。

だが、その二発の弾丸も、先ほどのパラベラム弾同様に、金属の装甲に着弾したと同時に跳弾した。

「徹甲弾を跳弾させるほどの装甲って、一体どんなんだ――よっ！」

その異常な光景についつい口を開いて突っ込んでしまったおれのアゴに、メタウサ二号はプロ顔負けの蹴り上げを放つ。

（足も使えるのか、こいつは！？　本当にウサギか！）

おれはアゴを上げることで攻撃を回避。爪先がアゴを掠める。

腕を交差させた丁度ど真ん中に、高く上がった足をそのまま振り下ろしての踵落としが落ちてくる。

ロボットのくせに起用に片足立ちをしてみせるメタウサ。この姿勢なら攻撃できまい。おれは両腕に力を入れて足を上に持ち上げて、姿勢を崩そうと試みる。

が、その前にメタウサが動いた。おれが持ち上げている足を軸に空中で一回転しながら、もう片方の足でおれの側頭部に蹴りを叩き込んできた。

かろうじて二の腕を使って直撃は避けられたものの、外見が伊達にウサギの形をしていないメタウサ二号の脚力は大したもので、お

れの体は吹き飛び壁に強くぶつかった。その時に銃を手放してしまう。

「ああ、クソ……いってぇなぁ」

地味に強打してしまった頭を振りながら、ロボットらしからぬ身軽な跳躍でこっちに飛んできながら拳を突き出してくるメタウサ二号。どうやら休ませてはくれないようだ。

おれは横に転がりながら凶暴な右ストレートを回避して銃を回収する。おれの後ろにあった壁がメタウサ二号の拳で穿たれる。砕いてはない。ただ必要最小限の箇所に、最大の力を叩き込んでいる。

壁に減り込んだ拳を抜いて、ステップを踏むメタウサ二号はおれと向き合って構える。いやホント、さっきのは利いた。と言うか、よくあんな体勢で相手に蹴りを入れられるものだと思う。

さすがと言うべきなのかどうかは知らないが、篠ノ之束はやはりすごい。二足歩行ロボットに戦いをさせられる技術には驚きだ。これが量産されて販売、なんてなったら、おれたちも商売上がったりだ。こいつは強い強い。

まさか、ロボット相手に一撃もらうとは夢にも思わなかった。もしかしておれは、世界で始めてロボットから一撃をもらった人間かもしれない。

おれはコートから既に割れているチョコレートを取り出し、欠片を二つほど口の中に放り込む。

（このままだとおれ、死ぬかもな……）

相手は無機質なロボット。こちらは血の通った人間。戦いが長引けば体力の関係で動きもキレも落ちてくるこちらが圧倒的不利。

昔、偉い人は言ったものだ。戦は早く始めて、早く勝負をつけろ――と。

まったくその通りだ。ここで時間を食っている場合ではない。とっとと早いうちに博士を捕まえなくては。彼女のこれまでの行動を見るにいつ気分を変えてどろんするかわかったものじゃない。

おれは粒子変形（ターン・オーバー）に一瞬意識を向け、領域内に粒子状態で保存してある十五種類の武器の中から一つを選択。

名称――イーストシミター。

手に持っていた銃剣が粒子化する。

その隙をメタウサ二号が見逃すはずもなく、軽快なテンポで急激に距離を詰めてきた。えぐるような左ストレートが放たれる。

おれは右に動きながらその攻撃を受け流し、足を引っ掛けて重心を崩す。

そこからさらに蹴りを叩き込んでやると、メタウサ二号は意外と呆気なく倒れた。

その頃には既に粒子は武器の形を呈していた。

一見すればそれは片刃の剣だった。なぜ刀と言わないかと言えば、

その剣には反りはおろか、鍔がないからだ。代わりと言ってはなんだが柄頭にはコの字型のフックがついている。

刀身の途中までが床に突き刺さっているためか、イーストシミターが墓標のようにも見える。不吉だ……。

相手が体勢を立て直す前にその剣を抜く。

その頃には既に体勢を立て直していたメタウサ二号。

おれはイーストシミターを水平後方に構える。

「さて、と。行くぞメカウサギ。攻撃ばっかりで防御がダメなんてお粗末な鍛え方してないよな？」

その頃、篠ノ之束はと言うと、竜胆とメタウサ二号との戦いを、別室にてポップコーンを食べながら観戦していた。

「いや、すごい！　すごいね、この子！　この束さんが作り出したウサギちゃんと渡り合うなんて。ちーちゃんに負けず劣らずの化け物だ♪」

Ｌサイズの紙コップの中に入ったポップコーンを撒き散らしなが

ら足をバタつかせる束。その表情は自分と同じような、あるいは彼女と同じような同類を見つけたためか、笑っていた。

「それにしてもあの武器は一体なんだろうね？　ＩＳの武装粒子化能力を使ってるのはわかるけど、ＩＳは男の子には使えないし――」

ＴＶ画面の向こうでは竜胆とメタウサ二号が文字通り火花を散らしながら戦っていたが、竜胆が使っている粒子変形（ターン・オーバー）に興味を持った今の束には、メタウサ二号の片腕が宙を舞って地面に落ちたことなんてどうでもよさそうだった。

「う～ん、もしかしてこの子、実は女の漢（こ）なのかなぁ？　それなら納得だけど――」

束の言葉に訂正を入れるなら、竜胆はちゃんとした男性であり、決して女の漢（こ）ではない。

だが、束がそんな事をわかるはずがなく（当たり前だ）、他にも次々と仮定と予想を立ててはああでもない、こうでもない、あ、これはあって欲しいかも、と妄想を膨らませていた。

その間にもう片方の腕を叩き落した竜胆のイーストシミターが、そのままメカウサギの胴体を一閃した。

「って、わーーーっ！　いつの間にか終わっちゃってる！　なんで！？　なんで勝手に終わらせちゃってるの！？」

ＴＶ画面に文句をいっても仕方が無いだろうに……。

「あっ、でも終わっちゃったら、次の刺客を送ればいいだけか。あ

はっ♪　束さん、あったまいい♪　じゃあ、ポチットな」

はぁ、このウサギめ。近接戦闘しか出来ないなら初めからそう言ってくれ。だったかこうまで手がかからなかったものを。

おれは完全に動きを止めたウサギの頭を爪先でつつきながら内心ぼやく。

（さて、今の戦いはどっかから監視されてたはずなんだが……）

と、おれは周囲の壁や天井を満遍なく見渡してみるが、カメラらしきものは見当たらない。

まぁ、見つけたからと言って何が出来るわけでもないのだが。

「さて」

おれはイーストシミターを拳銃に変えて再び通路を歩き始める。

そして早々、ガッコンガッコン重苦しい音が通路に響いた。

音源は後ろ。振り返ってみると一部天井がゆっくりと落ちてきていた。おいおい、ここは忍者屋敷か何かか？　ギミック多すぎだろ……。

おれは銃を構えて早々、天井裏に立っている完璧な人型ロボットに目を奪われた。

全長二メートル前後。グレーを基調とし、組んでいる太い腕には縦にラインが入っている。

それが一体何か、と言うのは、大分慌てた様子のマドカからの通信でわかる。

『おい竜胆！　お前の近くでＩＳの反応があるぞ、気をつけろ！』

ああ、あれってＩＳなのね。まぁ、生みの親の研究所に乗り込んでるんだから一機ぐらいは居ると思ったけど、まさか生身で相対するとは思ってみなかった。

「お嬢ちゃん、それを言うの少し遅いかな？」

『まさか接敵したのか！？　待ってろ、いや、すぐに逃げろ！　今すぐ――』

「ダメだ、お嬢ちゃん。お嬢ちゃんは待機を継続。外に出てきた博士を捕まえるために《ゼフィルス》で監視を続けてくれ」

『だが！』

「いいか、お嬢ちゃん。ここでこんな代物が出てきたってことは、向こうが追い詰められてる証拠だ。いまお嬢ちゃんがおれを助けに来たとして、その間に博士が逃げる算段である可能性が高い。だから待機だ」

『わかってる！　でも！』

おれは無駄だとわかってはいても、サブマシンガンに形を変えた粒子変形（ターン・オーバー）の引き金を引く。無論、その弾丸は全て『シールドエネルギー』によって弾かれ――……どうやら、対人銃程度では『シールドエネルギー』を使う必要性も無いらしい。

おれの撃った弾丸は、そのままＩＳの装甲にぶつかる。だがそれは貫通することはおろか、装甲をへこませることすら出来ずに跳弾して壁を穿った。

まぁ、全身装甲（フルスキン）タイプのＩＳだ。攻撃の強弱を機械が計算して、装甲を貫くと思われる攻撃に対してのみ、『シールドエネルギー』が発動するようになってるんだろう。最近はやりの省エネと言うヤツか。エコでいいじゃないか。

「大丈夫だ、お嬢ちゃん。おれは死なない。お嬢ちゃんの約束をほっぽって死ぬはずがないだろ？」

天井が床に着き、全身装甲のＩＳが天井裏から床に足をつける。

『……ああ、そうだ。お前は私との約束がある。それは絶対に守ってもらう。私の目的を達成するまで、私はお前の命令を聞く。私が目的を目の前にしたとき、お前は、そのとき私の邪魔をする回りを蹴散らす』

「ああ、その通りだ。と言うわけで、待機を継続してくれ」

『……了解』

通信が切れる。

おれは耳についているインカムをむしり取り横へ放り投げる。

目の前に対峙するＩＳは、足の先から頭のてっぺんまでを強固な鎧で包み、腕を組んでおれを見下ろす姿は、どこか武人を連想させる立ち姿だった。

見た感じ外付け武装は無し。まぁ、ＩＳで外付け武装があるタイプなんてあまりないが。

さてと……。マドカには大人しく退いてもらうためにああ言ったのはいいが、正直、勝てる見込みは三分ぐらいしかない。

この場合、三分あることを喜ぶべきなのか、それとも嘆くべきなのか。まぁ、どっちでもいいか。

おれは粒子変形（ターン・オーバー）を対物ライフルへと変え、頭部に向けて引き金を引く。

これまで撃ってきた弾丸の中で貫通力・回転数ともに最高ランクの大口径が、顔の前に着弾する前に手の平で受け止められた。

（くぅぅっ、これでも『シールドエネルギー』は発動しないか……）

となると、あとおれの持ってる遠距離装備は効果はなさそうだな。となると近接戦闘しかないが、ＩＳ相手に生身の人間が近接戦闘を挑むなんて愚の骨頂。自殺行為もいいところだ。

（詰んだな、こりゃあ）

早々諦めモード。

少しずつ距離を取りながら引き金はそのまま引き続ける。

一発撃つごとにマズルブレーキによって横に排出された硝煙が濃くなってゆく。

目の前のＩＳは相変わらず片手で弾丸を受け止めるばかり。攻撃と言う攻撃をしてこない。

どうやら弾切れになった瞬間を狙っているようだ。だが生憎と粒子変形（ターン・オーバー）に弾切れは無い。

粒子変形（ターン・オーバー）は、武器を粒子として領域内に保存する。弾丸もしかり。だから、保存してある弾丸を、弾倉にそのまま送り込めると言う利点を持っている。つまり、弾倉が空になることが無い。イコール、弾切れ知らず。

おれはそのまま距離を開けて行き、別の通路に逃げ込む。

そしてすぐに機械の塊がゆっくりと動く音が後ろから近づいてくる。Ｐ．Ｉ．Ｃを使って飛行せずに、あえて歩いて追ってくるとは、搭乗者は随分といい性格をしている。

（だが、それはおれにとっては好都合だが）

おれは粒子変形（ターン・オーバー）に保存されている十五種類の武器の中から二つを選択。

名称――ワイヤーカッター。

名称――パイルバンカー。

プロローグ壱（後書き）

感想、お待ちしてます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4368z/

おれの名前か？　岩窟王ですが、なにか？　（嘘）

2011年12月15日00時46分発行